

令和7年1月

望ましい教育環境に関する基本的な考え

新城市教育委員会

1 小学校

新城市には13の小学校があり、全校児童数が10名ほどの学校から500名を超える学校まで、さまざまな規模の学校がある。令和6年度現在、1学年1学級の学校が7校あり、複式学級を有する学校が2校ある。

小規模校には小規模校のよさがあり、授業や行事など、あらゆる場面で、すべての子どもが主役になれ、子ども同士の結びつきが強く、異学年の子どもとのつながりも深い。また、教師が子ども一人一人のことをよく理解することができる。

一方、子どもの数が多い学校では、学級の中で、多様な意見や考えにふれることができ、いろいろな見方や考え方を学ぶことができる。また、集団の中で子どもが協力し合い、高め合う機会に恵まれ、日常的に互いに切磋琢磨できる環境にある。

人口減少や少子化の影響を受け、市内すべての小学校で、子どもの数が減少し続けてきたが、その現象に拍車をかける事態が生まれた。令和2年から始まった新型コロナウイルス感染症の流行である。新型コロナウイルス感染症の影響により、出生数が大きく減少したのである。令和2年度から令和5年度の4年間ににおける1年当たりの出生数の平均は175名である。この人数は、現在の小学校5・6年生のほぼ半数である。今後数年間で、特に小規模校において、子どもの数は大幅に減少する。

子どもは、仲間と生活を共にする中で、たくましく生きる力を養い、さまざまな他者の存在を知ることによって自己の成長につなげていくことができるが、学級を構成する子どもがあまりにも少なくなると、集団での活動（話し合い、合唱、チームスポーツ等）を経験できなくなり、社会性を育んだり、多様性にふれたり、子ども同士が切磋琢磨したりする機会を得ることが難しくなる。

新城市においては、平成の大合併以降、平成20年代半ばに、鳳来北西部地区、鳳来南部地区、作手地区において、小学校が統合された。それから10年ほどが経過したところであるが、子どもにとって望ましい教育環境を維持していくためには、近い将来、改めて小学校の統合が必要であると認識している。

2 中学校

小学校における顕著な児童数減少が起きて数年後に、中学校においても小学校と同様の問題が生じる。生徒数が減少することにより、現在1学年に複数の学級がある中学校でも、近い将来、1学年1学級の規模になることが予想される。

少人数の固定化された人間関係が9年間に渡って継続することは、必ずしも望ましい教育環境であるとは言えない。広大な面積を持つ本市においては、通学距離や通学時間

の課題等、解決すべき課題も多いが、可能な限り、人間関係が固定化されたものではなく、いろいろな仲間と学校生活を送る中で、子どもたち一人一人の成長を保障し、高校進学後や社会人となってからの生活にも円滑につなげられるように配慮すべきであるとする。

小中学校の教育環境が、子どもたちの成長に与える影響は大きい。また、小中学校の再編が、地域や市に与える影響も大きい。新都市で育つ子どもにとって望ましい教育環境はどうあるべきか、多角的な視野を持ち、長期的な展望に立ち、熟議を積み重ねていくべき時が到来している。

これまで述べてきたことを踏まえ、新都市教育委員会は、『望ましい教育環境』を次のように考えている。なお、ここに記す『望ましい教育環境』とは、子どもの数や学級数による学年・学校の規模を中心に考えたものである。教育環境という言葉は、一般的には、自然環境や校舎・教室等の物的環境、教師という人的環境、通学時間や通学距離等のすべてを含むが、ここでは、今後、新都市において、少子化が急速に進むことが想定される中で、子どもの数や学校の規模に特化して考え、『望ましい教育環境』として示す。

『望ましい教育環境』

小学校

子どもが、社会性を育み、多様性にふれ、互いに切磋琢磨できることが、子どもにとって望ましい教育環境であるとする。学校では、子どもが学級で生活する時間が多いことから、1学級に10名程度以上の子どもがいることを、望ましい教育環境とする。

中学校

小規模小学校が多い本市では、中学校でより多くの仲間と出会うことで、高校進学後や社会人となってからの生活にも円滑につなげられるようにしたい。子どもが、生涯において新しい環境に適応し、それぞれの環境で新たな人間関係を構築できるように、中学校では、1学年が複数学級で構成されることを望ましい教育環境とする。